4. 発表の内容

- ・ディスカッションの内容を講義形式の動画にして発表した
- ・日本と韓国の現状報告→議論の中で出た意見を発表の順番で発表した

社会グループ感想

雇用が奪われることやテロなど、難民を受け入れる上 でのデメリットは多くある。そのため難民を受け入れる べきかどうかはとても難しい問題だ。そのような中、グ ループの一人から「テロなどの問題は様々あるが、同じ 人間として困っている人たちを助けなくてはいけない。 だから日本と韓国は積極的に難民を受け入れなくてはい けないのではないか」という意見が出た。意見を述べた 人だけでなく、班には難民を積極的に受け入れるべきと 考える人がとても多かった。世界には難民の受入れに対 して反対する意見も多い中で、若い世代がたとえ他国の 国民であっても困っている人を助けなくてはいけないと 強く思っていたのである。その思いを持ち続けることで 世界中の難民との「共生」がはかれると感じた。しかし、 難民を受け入れるには、様々な課題が多い。そこで私た ちは難民を受け入れるにはどうすれよいのかを議論し た。議論の中で、「ディスカッションをする内に難民間 題について深く知れた。だからこそ学校の授業などで難 民についてもっと考える機会を増やすべきではないか」 という意見が出た。日本人にとっても、韓国人にとって も難民の存在は身近なものではない。そのため、私を含

め、班のメンバーも難民問題についてあまりよく知らなく、とても難しい議題であった。しかし、準備期間中、下調べを協力して行ったり、ディスカッションをしたりする内にだんだんと分るようになっていったことを実感した。だからこそ、難民を受け入れるにはまず、相手のことをよく知ることが必要であると感じたのである。

私は、大学のゼミや授業などでディスカッションをする機会が多くある。しかし、今回のように外国人とディスカッションをすることは初めてだった。育った国や環境が異なる韓国青年と話し合い、自分とは異なる考えに触れることで相手の意見や、抱えている問題を深く知ることができたと感じている。自分たちとは文化や考えが異なる人たちを受け入れることは容易ではない。相手のことを理解しないまま、共生を図ろうとすると互いに衝突が生じてしまう。私達のように深く話し合い、相互理解を図ることで、真の「多文化共生社会」を築くことができるのではないだろうか。互いに深い議論をし、相互理解ができるような機会を増やして行くことが重要であると今回のディスカッションを通して感じた。





テーマ	多文化共生
参加者	日本青年5名、韓国青年7名
トピック	<マスメディア・世代間の意識の違い>
	海外ニュースの取り上げ方に対する感じ方
成 果	お互いの国のメディアの取り扱われ方を議論したことで、メディアとの関わり方を見直す必
	要性があることを確認できた。

1. 両国の現状

	日 本	韓国
北朝鮮との関わり方	・話が通じない相手というイメージ・経済制裁を行う	・話し合いは続けるべきだ ・9億円の支援金を出す
北朝鮮のミサイル発射の 取り扱われ方	・Jアラートにより警鐘が鳴らされるな ど国民の不安は高まる	・頻度が多いため特に驚かなくなって きている
両国の政権の報道のされ方	・文政権は反日政権と報道されている ・安倍政権は憲法改正で賛否が別れて いる	・文政権が反日的な政策とは一度もしていない ・安倍政権は独裁的だと報道されている
どの報道メディアを 信じるか	・政府の資料を読むようにしている	・若者の支持が高い信用できるテレビ 局(JTBC等) ・カカオページ
LGBTにおけるメディア・ タレントの取り扱われ方	・お笑いやコメンテーター、ファッ ションリーダーなど様々な分野で幅 広く活躍している	・ホン・ソクチョンという芸能人一人 しか現在は活躍しておらず、深刻に 取り扱われる
LGBTの会社での 取り扱われ方	・芸能界で活動している方も多く、 LGBTに対して違和感を持つ人は少ない ・企業でLGBTのための政策がある	・街中で女装している人を見かけると 通報する人がいるかもしれない・罰金を払ってでも雇いたくない

2. 上記現状をふまえた上での意見交換の内容

近年、最も日韓で報道の差が見られたのは「北朝鮮」に対する報道であった。日本では北朝鮮の動向が逐一報道されているのに対し、韓国では報道が慢性化され鈍感になっている傾向があるようだ。両国の政権に対する報道のされ方では、お互いの国で報道されている背景を知ることができた。例えば日本では文在寅大統領が反日的だと報道されていたが、韓国青年側の意見によると、それは盧武鉉元大統領と同じ政党であるからで、直接本人の口から反日的な発言はされておらず、推測に過ぎない報道であると述べていた。また、韓国で安倍政権が軍国主義だと報道されている背景には植民地支配時代のトラウマから敏感に反応していることが分かった。

LGBTなどのマスメディアの取り扱いの差も大きかった。日本ではLGBTの方がタレントや歌手、ファッションリーダーなど幅広く活躍しており、特に抵抗感を感じることはないが、韓国では現在テレビで公表して仕事をしている人は一人しかおらず、深刻に取り扱われがちだと述べられていた。

3. まとめ

今回のディスカッションの大テーマが「多文化共生」であり、多文化共生を達成するためにマスメディアはどのように報道していくことが必要かを議論した。報道では時に推測に過ぎないことも実際に起こったことのように取り扱われることがあり、このようなことが国家間の摩擦の原因となることがある。情報をそのまま鵜呑みにするのではなく、その出来事の背景や他国での報道のされ方など、多面的に情報を集めることが必要である。また、報じる側のマスメディアは正しい情報を提供することに責任を持ち、他国での報道のされ方も同時に報道することや、その事象のバックグラウンドを補足するなどの対応が必要であると今回のディスカッションで結論付けた。

マスメディア・世代間の意識の違いグループ感想

私たちのグループでは、「海外ニュースの取り上げ方 に対する感じ方」をトピックにした。

自主研修中に、インターネットや文献を利用して各自 で勉強し、その内容を週に一度程度グループで共有し た。全員が調べ、意見交換をする積極的で充実した自主 研修となった。

実際のディスカッションでは、前半に「海外ニュース の取り上げ方 | を議論した。具体例の一つとして、北朝 鮮のミサイルに対する報道の違いを取り上げ、それによ る一般市民の反応には顕著な差があることが分かった。 両国のメディアの現状を知り、このディスカッションの 意義を改めて感じることとなった。

また、後半には、LGBTがどのようにメディアで取り 上げられ、社会ではどう捉えているのか意見交換をし た。日本においては、いわゆる「オネエタレント」等が 珍しくないが、韓国ではその存在自体が稀有なものであ ると分かった。その結果、一般市民の受け入れ方にも違 いが見られた点が興味深かった。

そして、最後にまとめとして動画を作成した。報道番 組風の寸劇に挑戦したが、セリフを考え、小道具を用意 し、屋外でも撮影をするなど趣向を凝らした。作成に当 たっては、目韓の青年がアイデアを出し合い、セリフを

それぞれの言葉に翻訳し、お互いの撮影に協力した。真 剣に議論し合ったグループのメンバーと共に楽しく作業 したことで、より絆が深まったように感じ、強く思い出 に残っている。

このディスカッションの結論の一つとして、「メディ アでの報道を鵜呑みにせず、その事実の背景や他国での 状況など多面的な情報収集の必要性」が挙げられる。

私は、これまで何度か韓国に行く中で、日本で報道さ れる韓国とのギャップを感じる場面が多くあった。ま た、今回の派遣期間中にも日本のメディアが報じている ような「反目」を感じることなど一度もなかった。この 先入観を抱かせる原因の一つであろうメディアの報道の 仕方について議論できたことは有意義だったと改めて感 じる。目々のニュースは、報道を通して私たちの目に触 れる。しかしながら、時間や文字数に制限のあるメディ アでは、全てを理解することは不可能であると気づかさ れた。だからこそ、積極的な情報収集が重要なのだと思 う。このディスカッションを無駄にせず、まずは自分か ら、関心を持ったニュース、疑問に思った報道につい て、様々な国のニュースサイトを見るなど背景を知る努 力をしていきたい。





テーマ	多文化共生
参加者	日本青年5名、韓国青年7名
トピック	<仕事観>
	様々な仕事観を持つ人は共生できるのか
成果	お互いの国で、仕事をする上で必要な条件を理解し合い共有できた。

1. 韓国の現状

- ・韓国側は仕事をする上でお金が一番重要だという意見が多かった。韓国は貧富の差が大きく、生きていくた め、家族を養うためにも就職先の条件にお金を第一に考えていた
- ・韓国の多くの企業では残業することが普通となっているにもかかわらず、その残業に対する正当な賃金が支 払われていない。残業代を支払う事が法律で定められていない
- ・生きていく上で社会的地位は重要になってくる。韓国の仕事における社会的地位とは大企業に就職すること であった

2. 日本の現状

- ・日本も同様に、お金を稼ぐことが自身のやりたいことへの投資にもなる
- ・差異点として、日本にはお金を稼ぐことよりも趣味を仕事にしたり、夢を叶えようとしている人もいる
- ・社会的地位に対する考え方は韓国とあまり差はないが、社会的地位が低くとも自分のやりたいことができれ ば幸せだという人もいる

3. 上記現状をふまえた上での新たな発見

- ・韓国ではお金を稼ぐこと=仕事という概念が日本より強いイメージがあったが、日韓で共通していたのはや りたいことをするためにお金を稼ぐという事が一番大事であるということだった
- ・また、韓国の企業の多くは日本のような福利厚生が整っていないというのも新たな発見であった。福利厚生 が整っている会社は大手の上場企業であり、そのため韓国の若者たちは大手企業、または公務員を目指して いるというのが明らかになった

4. 発表の内容

- お金を稼ぐことは自身への投資にもつながる
- ・韓国では大企業に入りたいという希望も多いが日本ほど福利厚生制度が整っていないため、女性の多くは、 結婚や出産を希望しても中々実現できない。就職と結婚・出産に矛盾が生じていた。最終的な日韓における 理想の職場に求める条件はお金・福利厚生・社会的地位という結論に至った

第2章 日本青年韓国派遣 ■ 49

仕事観グループ感想

討論会に向けて、私たち5班は事前研修から準備を始 めた。その時5人で話し合って決めたテーマが「仕事 観」である。このテーマに決めた理由は最近の韓国の受 験戦争や就職難、若者の失業率の上昇などから、日本人 と韓国人で仕事への考え方に違いがあるのか、今の韓国 社会の現状をどう捉えているのかを直接質問し討論した いと考えたからである。

当日、私たちの討論は価値に個人差があるテーマだっ たこともあり難航し、グループとしての答えをなかなか 出すことができなかった。しかし、話していく中で日本 人と韓国人の仕事への考え方に共通点と差異点を見出 すことができた。まず、お金に関しては両国とも重要で あると考えており、やりたいことに対する投資にもお金 が必要であるという考え方だったが、日本側は、やりた い仕事ができていれば比較的給料が安くても満足である という考えなのに対し、韓国側は、やりたい仕事で稼げ ればよいがそうでない場合は仕事とやりたいことは分け て考え、第一にお金を稼がなければならないという現実 的な意見が多かった。その理由として彼・彼女らの親世

代は韓国が豊かな時代ではなかったため、子供たちには 勉強していい企業に入って楽に暮らしてほしいという親 心も影響しているかもしれない。次に時間的余裕に関し ては両国とも定時に終わる仕事がいいという考えだった が、日本側がプライベートを削ってでも仕事し、残業代 で稼ぎたいと考える人がいるのに対し、韓国側は残業代 が正当に払われていない企業も多く、サービス残業を強 いられているのが現状である。最後に社会的地位に関し ては両国とも家族を養い守るために高い地位で働きたい という共通点がある一方で、韓国は日本よりも中小企業 や派遣社員に対しての世間の目が厳しく大企業に入らな いと失敗したと考えられる雰囲気があるようだ。

この討論を通して、以前は七放世代という言葉が生ま れるように韓国の若者には将来への夢も希望もないとい うイメージがあったが、社会が厳しい状況にあるからこ そお金に対して現実的で将来への意識が高い人が多いと 感じた。しかしその反面、大企業以外への世間の目が厳 しく、生きにくい社会のようにも感じた。



